



第69回香川県母親大会が3日、高松市で開かれ、母の被爆体験とノーベル賞授賞式をテーマに記念講演しました。

松浦氏は広島で被爆した母親の体験（自身は胎内被ばく）や広島市の原爆被害、戦後の被爆者の苦しみを、被爆者運動の歴史、オスロでの日本被団協のノーベル平和賞授賞式の様子などを語り、「自分が生きていくうちに核兵器禁止条約が成立・発効したように、停滞や逆流はあっても、必ず人類の英知は発揮される希望がある。核兵器も戦争もない世界のために力を合

## 核兵器も戦争もない世界を 香川県母親大会

民主香川

定価 月 100円  
発行所  
民主香川社  
高松市藤塚町  
3丁目13-14  
☎(087)834-7311

## 香川町で平和のための戦争展



平和のための戦争展 in 香川が、7月27日、高松市香川町コミュニティセンターで開かれました。今年で13回目です。映画「サイレント フォールアウト」（伊東英朗監督作品）が上映されました。作品は、核兵器の実験を繰り返してきたアメリカ自身の、大陸全体が放射能で汚染され、女性たちや研究者が立ち上がる姿が描か



れ、「知らないことが多かった」「自分の地域でもこの映画の上映をしたい」という感想が寄せられました。「原爆と人間」「高校生が描いた原爆の絵」「戦争と国民弾圧―治安維持法」などのパネル展示も多くの人が見て、高松空襲を5歳で体験した喜多忠良（85）さんの絵も展示され、本人が絵の説明をし、体験を語りました。

わせよう」と呼びかけました。参加した30代の女性は「被爆者が減るなか、どう語り継いでいくのが課題だ。語り部の気概や使命感

を感じた」と話し、70代の男性は「松浦氏の話が心に迫った。私自身、被爆2世として語り継ぎ、訴えていくと励まされた」と語りました。

## 問題台教太

朝日新聞で7月28日から「子育て教員のリアル」のタイトルで、①離職、②時間外勤務等の連載が始まりました。ある30代の教員は仕事が好きなでやりがいを感じる一方、子育てと仕事の両立が難しくなり退職。仕事が終わらず、子どもを寝かせ、深夜の学校に仕事に戻り、睡眠時間は4、5時間。このような報道により、志願者がまた減るのでは、と不安になります。

小中学校の不登校は前年度比15・9%増。公立学校の教職員による精神疾患休職者は過去最高です。その主な要因は児童生徒指導、対人関係、事務業務です。全国や香川県でも必要な教員の配置の不足数も過去最高です。

いま子どもの声に耳を傾け、受け止める生身の教職員の増員と、長時間労働の解消こそが必要です。今年の香川県教員採用試験の倍率は過去最低の3・9倍です。教員はやりがいのある素晴らしい仕事。子どもの未来を守るため、教育予算をせめてOECD平均並みに。(一)

【3面から】 極度に短縮されたことによる危険性です。

米国の核ミサイルの元監督官で現在はプリンストン大学で教えるブルース・ブレア氏によれば、「ロシアはプロセスの自動化によって発射までの時間を短縮した。モスクワから、遠くはシベリアまで離れた発射装置からミサイルを直接発射するのに、ロシア軍の指揮官が必要な時間は数秒ほどだ」そうです。

8月の民主香川の発行は、お盆休みのために第1・第2・第5週の発行となります。ご了解下さい。

人間にとって判断ミスは避けられません。アメリカでも、そのシステム上、攻撃を感知した場合には6分間でどこを標的に、どのような兵器で反撃するか見定めなければならぬ、との報道もあります。アメリカの大統領は、相手国からの核弾頭飛来を報告を受ければ、選挙で国民の意向を問う事はもちろん、



議事に諮ることなく全く一人で、しかも6分程度で決断しなければならないという事になります。果たしてこれは現実的なことなのでしょうか。私たちが問わなければならないのは、アメリカに限らず、各国の指導者が一人だけで、しかも短時間のうちに、正確な判断が出来ると言つことを前提としているしくみそのものだと思います。

要するに、核兵器は、それが存在するだけで危険だという事です。そして、地球上に核兵器が存在する限り、私たちは全員「被爆者候補」です。私たち自身が「被爆者候補」から「被爆者」にならないためには、やはり、「核兵器禁止条約」の実効性を高め、核兵器の存在そのものを拒否するしかありません。

## 讃岐の文学碑めぐり ③1

小豆島が生んだ詩人 壺井繁治（一八九七〜一九七五）

文・写真 深沢 雨根

一九八四年十月、詩人の土井大助、詩人会議の城角前川忠夫県知事、内海町長ら五百十人が参列して、壺井繁治の故郷、内海町堀越において詩碑の除幕式が行われた。

石は／億萬年を／黙つて／暮しつづけた  
その間に／空は／晴れたり／曇つたりした

この「石」と題する詩は処女詩集『壺井繁治詩集』（一九四二）に収められている。短いながら宇宙の悠久を見事に表現した詩である。この詩碑の建立はすぐには実現しなかった。戦前プロレタリア文学で活躍した繁治は、何回も思想犯として検挙、投獄された日本共産党員で、地元の人々のためらいがあったからである。そうした中、詩碑の建

設に尽力したのは、作家の佐々木正夫氏、マルキン醤油会長の木下元義氏、内海町長の川西寿一氏らであった。

壺井繁治は一九二九年二月、日本プロレタリア作家同盟が結成されたとき、中央委員に選出されるとともに、文芸誌『戦旗』の発行担当者になった。一九三一年、宮本顕治の推薦で日本共産党に入党する。次第に弾圧が激しくなり、一九三四年までに計六回検挙され延べ三年間留置所と刑務所に収監された。郷里の母は繁治の入獄を知って、心痛のあまり発狂（軽症）したという。

敗戦後、繁治は新日本文学会の設立発起人の一人になり、文学運動の第一線で活躍する。一九六一年、六

十年安保闘争後の挫折ムードが広がったとき、繁治は「球根」という詩を書いて人々を励ました。

君は／君の内部に球根を育てているか。  
時がくれば／どんな凍土をも突き破る、  
エネルギーをたくわえた球根を

一九六二年、「詩人会議」を結成し、六五年から亡くなる七五年まで運営委員長を務めた。月刊誌『詩人会議』の「詩人会議賞」は、一九七八年から「壺井繁治賞」と名称を改め、今日に至っている。「二十四の瞳」を書いた壺井栄は、繁治の妻である。栄の文学を開眼させたのは繁治といつてもいい。繁治と結婚していなかったら、栄の名声はなかったであろう。



繁治の詩碑